

平成4年（1992年）7月27日  
第51回『21世紀塾』参考資料  
（第1回提言）

## 『接待茶屋』への期待

『21世紀塾』代表世話人 小野 徹

### 【問題提起】

以前『21世紀塾』に来られた旅行関係の講師の方から「三島人には挨拶がない」と大変手厳しい指摘をされたことがある。

自分自身でも思い当たることがあったが、その後気を付けて歩いていると、確かにその指摘が当たっているような感じがする。

講師の言う「挨拶」には、一番身近な親子関係から、近隣、学校、職場等、もろもろ集まりの中で交わす潤滑油としての「挨拶」の他に、観光客や他所から来て道を尋ねる人に至るまで、同じもろもろの「他所者」に対する「挨拶」を含んでのことだろうが、やや比較の難しいこの言葉を、「もてなし心」と置き変えてみれば、非常に分かりやすい。

例えば京都だ。

京都に行けば「おいでやす」とか、「おおきに」といった、三島の我々でさえ知っている程の、「もてなしの心」がそのまま言葉になったとしかいいようのない言葉が、どこからでも聞こえてくる。

それなら我が三島はどうだろうか。

三島のタクシーの運転手が、遠来の客に「良くおいでくださいました」と言ってねぎらっているなどとは聞いたことがないし、寡聞にしてこの言葉を「三島弁」で何と言うのかも知らない。

駅前の市内案内看板はどこを向いているのかわからないし、世に謳われた「三島宿」や、「水の都の面影」はどこをどう行けば探されるのか、三島人が街道一の祭りだとはしゃいでいる祭りの主役「シャギリ」とはどんなものなのか、知るすべもない。

バスで来れば来たで、道は狭いし、駐車場はない。しかも、大勢で食事をする場所もない、E t c. E t c. . . .

日本一観光客が訪れる伊豆・箱根を背後に控えながら、このていたらくである。

――それなら、昔からそうだったのか。

そうではない。三島には何と無料の湯茶で旅人をもてなしたという、『接待茶屋』があったのだ。

勿論、歴史的にも、全国に例をみない「もてなし心」である。

詳細は箱根関係の資料に譲るが、険しい箱根八里を超える旅人を迎え、励ますのに、私たちよりほんの少し以前の三島の先達が、これほどの「もてなし」をしていたということに、本当に頭が下がる思いがする。

幸い「東海道ルネッサンス」という、国をあげ、県をあげて「人のぬくもりを感じさせる旧街道復活」の大事業が動き出す中で、ハードの面でもソフトの面でも、様々な先達の叡知を振り返る絶好の機会に当たり、三島人の「もてなし心」の復活も、是非、併せて考えなければならぬと思うのは、私だけだろうか。



昔の「接待茶屋」の場所ではないが、平成9年3月にようやく完成した山中城跡の案内所・売店とトイレ